

羽村ゆかりの講談師

田辺 凌鶴 in ゆとろぎ



特別ゲスト
一龍齋 貞山

前座 田辺凌天

出演：田辺凌鶴、特別ゲスト 一龍齋貞山、田辺凌天

平成30年 3月17日(土) 開場13:30 開演14:00
羽村市生涯学習センターゆとろぎ 小ホール

大人(前売) 1,000円 (当日) 1,200円、高校生以下 500円 全席自由(未就学児入場不可)

ゆとろぎ窓口 (9:00~17:00・月曜休館) 042-570-0707、羽村市スポーツセンター (9:00~17:00・月曜休館) 042-555-0033

マルフジ 青梅・羽村・福生市内6店舗のサービスカウンター、西多摩新聞社チケットサービス (土日定休) 0120-61-3737

インターネット販売(「チケ探」<http://zenkoubun.ticketan.net>)

問合せ：羽村市生涯学習センターゆとろぎ 042-570-0707 (月曜休館、9:00~17:00)

主催：羽村市教育委員会生涯学習センターゆとろぎ 企画運営：ゆとろぎ協働事業運営市民の会



羽村ゆかりの講談師 田辺凌鶴 in ゆとろぎ

講談とは

「講談」と「落語」はどう違うの？

「講談」「落語」の違いは一体どこにあるのでしょうか。簡単に言ってしまうと、「落語」が会話によって成り立つ芸であるのに対し、「講談」は話を読む芸という言い方ができます。勿論、読むといっても単なる朗読とは違い独特のしゃべり調子と小道具の使い方によって展開される訳なのです。よく使われる小道具として有名なのが張り扇と釈台(机)です。

張り扇で釈台を叩きパパンという音を響かせて調子良く語ります。この小道具を巧みに使った芸こそ「講談」ならではのものです。また、「講談」は「落語」と比較して歴史が古く、奈良、平安の頃にその原型が見られます。但し、一般に良く知られる「講談」の始まりは「太平記読み」とされています。食に困った浪人が老若男女を集めて「太平記」を面白おかしく読んで聞かせたというもので、これが「講談」のルーツです。

講釈師、見てきたような嘘をつき。パパン、パン、パン、パン。

張り扇で釈台を叩き、調子良くメリハリをつけて語ります。

「講談」は何よりもそのリズムが命です。リズムカルな話芸の妙味によって、どんな荒唐無稽なお話でも嘘いつわりのない本当の出来事のように思わせてしまいます。「講釈師見てきたような嘘をつき」「講釈師扇で嘘を叩き出し」とは昔からよく使われる言葉です。

嘘のことも本当にしてしまう話芸のマジック。そこにこそ講談最大の魅力があるのです。

黄門様も講談が本家本元。

「この紋所が目に入らぬか!」今でもTVドラマで人気者の水戸黄門。もともと江戸時代に「黄門漫遊記」のタイトルが講談で扱われたことが人気を得たきっかけです。以来、実際には旅行などめったにしななかった黄門様はスーパースターの道を歩き始めました。その他、大岡越前、国定忠治、柳生十兵衛、清水次郎長など映画、TVのヒーロー達の活躍も講談が生みの親と言えます。

いわば講談は話の宝庫。一度高座をお聞きになれば話の収集家になれること間違いありません。



田辺 凌鶴 (本名:喜多村 充伸)

東京都福生市生まれ 羽村町(現:羽村市)五ノ神幼稚園卒園
福生市立福生第六小学校卒業
福生市立福生第二中学校～瑞穂町立瑞穂第二中学校卒業
都立立川高校卒業
中央大学法学部卒業

平成12年4月 講談協会前座見習

平成12年8月 前座

平成17年10月 二ツ目昇進

平成22年 一鶴死去のため一邑門下へ移籍

平成24年10月 真打昇進



一龍齋 貞山

昭和22年 七代目貞山の長男として東京に生まれる

昭和41年 父親没後、六代目神田伯龍の養子となる

昭和45年 立正大学国文学科卒業。同年四月一日、講談定席上野本牧亭にて
神田伯梅の芸名で初高座

昭和46年 二ツ目昇進

昭和52年 真打昇進 八代目貞山を襲名

平成元年 第四十四回文化庁芸術祭賞受賞

主な読み物: 赤穂義士伝(外伝・銘々伝を主)・大岡政談・怪談・出世談・白浪物・宗教講談

※ 講談協会オフィシャルウェブサイトより抜粋